

Title	小特集：数理経済学国際会議
Sub Title	序 Preface
Author	丸山, 徹
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1994
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.1 (1994. 4) ,p.24- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集：数理経済学国際会議
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19940401-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小特集：数理経済学国際会議

平成5年7月上旬、三田山上を舞台に、数理経済学の国際会議が開催された。

この学会の目的は経済分析の数学的基礎づけにかかわる諸問題を、とくに解析学の視点から検討することにあり、きわめて専門性の高い会議となった。

経済学を「経済」という生き物を対象とする医学にたとえるならば、その研究は人間を対象とする医学と同様、臨床と基礎のふたつの部門に大別できるかもしれない。経済の疾患の直接的な診療にあたる臨床医としての経済学者と、人の目にふれにくい研究室の奥深くで、経済の疾患の病理や治療法の解明をめざす基礎部門の経済学者——経済学の健全な発達を約束する鍵は、まさにこの両者のバランスのとれた協力の中にこそ求められねばならない。今次の学会は経済学の基礎部門の、そのまた最も基礎に位置する、地味な研究領域を主題とするものであった。

経済現象を解明する理論は、もちろん簡明であればあるほど望ましい。しかし科学としての簡明さは必ずしも日常的な平易さを意味しない。複雑な現象を分析する理論を日常的な言葉と論理で語ろうとすると、往々にして推理の厳密さが損われ、不透明な曖昧さが残り、かえって事態の錯綜を招く恐れがある。そのようなとき、数学固有の厳密・明澄な分析力が威力を発揮するのである。

経済学にとって数学とは、分析の道理を明確に表現し、厳密な推理を促進し、最も本質的な意味で理論を単純化するための道具なのである。しばしば誤解されるように、数学は理論をわざわざ難渋にするための遊戯ではなく、真理はその逆である。

19世紀前半の数理経済学者A. クールノー以来、経済分析にはさまざまなタイプの数学が利用されてきた。しかし現代の数理経済学は、既存の数学を受動的に利用するばかりでなく、むしろ経済現象の自然な把握・解明を図るために数学上の新しい理論を開発しながら進む、一層積極的な時代を迎えたといわねばならない。この動向を実り豊かなものとするためには、経済学・数学両分野の密接かつ寛大な協力が不可欠である。両学界第一線の学者が、忌憚なく研究成果と意見とを交換する場を提供できたとすれば、この会議の目標の一半は達せられたのである。

このような学会の企画が話題にのぼったのは4年前、京都で国際数学会議（ICM90）が開かれた頃のことである。そしてG. ドブリュー（UCバークレー教授・ノーベル賞受賞者）、伊藤清（京都大学名誉教授・日本学士院会員）、K. ファン（UCSB名誉教授）、福岡正夫（本塾大学名誉教授）といった大先輩たちのご指導の下に、企画は次第に具体的な内容を整え、本塾経済学会・東京工業大学共

催、日本経済新聞社後援という形で、実現のはこびに至ったのである。このような専門性の高い地味な学会に、温かいご理解とお力添えを賜った関係各位に対し、深く感謝の意を表したい。

学会の運営にあたり、私ども準備を担当する者がとくに留意したのは次の諸点である。

第一に、学会のテーマを明確に限定し、非線形解析・凸解析・確率解析という解析学の特定の諸分野と経済分析との接点に焦点を絞ること。今日の数理経済学の動向に鑑み、これらが最も進歩が速やかで、しかも重要な分野と判断したからである。

第二に、講演者はこの方面の研究を名実ともにリードする学者の中から選ぶこと。文字どおりの大家と、現在第一線で働く学者をバランスよく組み合わせることに意を用いた。

会議の全貌を伝える英文の議事録は、目下出版に向けて準備が進められている。ここでは現在までに提出された最終原稿の中から、四編を選びこれを邦訳して、『三田学会雑誌』の読者にも紹介することとした。

この学会の成果が数学・経済学双方の発展に貢献できるならば、またこのような基礎的で地味な学会の意義を多くの方々に理解していただくことができるならば、企画者のひとりとしてこれにまさる喜びはない。

丸 山 徹

(経済学部教授)

※次の法人・個人より多大のご協力を賜りました。特に記して厚く御礼を申し上げます。

野村証券投資信託委託株式会社

慶應義塾経済学会

日本経済新聞社

株式会社大和総研 代表取締役社長 奥本英一朗氏

株式会社橋本産業 代表取締役社長 橋本脩一氏

片岡 隆氏

財団法人社会科学国際交流江草基金

日本学術振興会

湘南工科大学

東京工業大学

株式会社ワコム

東京工業大学本間研究室

株式会社大雄建設

有限会社サイケンビソウ

株式会社近代科学社

株式会社聖文社